愛知教育大学研究報告，44（人文科学編），pp. 222～211, February, 1995

桜田勝徳と〈海産物需給民俗〉

―日本民俗文化の海洋的性格形成について（一）―

野地恒有
（日本文化選修）

はじめに～海洋的性格とは～

日本民俗学において漁村・漁業研究のパイオニアである桜田勝徳（明治三十六年～昭和五十二年）の研究について、私は、かつて、次のようにまとめた。

昭和九年の第一作『漁村民俗誌』から十七年の第二作『漁人』に至る過程で、漁村民俗研究の視点を地先沿岸漁業の生産機構と村落組織の結びつきのあり方に絞り込んでいった。それは、当時のそれまでの民俗調査研究の動向をふまえたとき、もっとも有効で生産的な方法として示されたものであったが、同時に限定的到達点であり、限界点であった。そして、『漁人』の成果に裏打ちされた視点は、昭和二十年代から三十年代に自らの研究を「漁業民俗」・「漁村民俗」と標榜して方法論的にまとめていく中核となるとともに、『漁人』の限界点を打ち破っていくことにより新たな問題が提起されていった。[*1]

このように桜田の漁村研究を方向づけた『漁人』の序文において、彼は、次のように述べている。

「我々が漂たる東海の帝国に生を享け乍ら、其の多くが海に背を向けて生活を続けて来たことは思えば不思議である。我々の大部分が如何に海に退嬰的であり、ほんの一部の国民が如何に漁業や海に進取的であって、海上を闊歩して来たかと云う事を、まず充分に私共は知って置くべきだと思う。

（中略）

漁業を通じてみると、海に達者な同胞は残念乍ら極く一部に限られていた事が判るが、然しながらまた翻って我々が日常生活を規制する種々の習慣に就て観察するに、塩や潮水による浄めの如きは極めて広範囲に行き亘り、また神送りや祭の神幸等の如き海汀、潮水に由来すると考えらるる慣習も極めて多く存在しているのを知る。

即ち我々が海から遠ざかった生活を続け乍らも、然も海に根差した行為思考上の様式を少なからず保持して来ていたのである。いわば海洋性とも称すべき伝統が我々民族を深く貫いて流れて来ているものと思わざるを得ない。

単に過去の遣唐使や八幡船の事績等を掲げて、我々を海洋民族なりと吹聴しても、事実はあまりに喰い違い容易に賛同しかねる所であったが、我々身辺の禊ぎや祓い等の慣習に注目して

みると、今更の如く神話の潮の濃さを身辺に感じ取る事が出来ると信じる。[*2]」

序文論旨を示す主要部分の引用である。補足してまとめると、日本文化の海洋的伝統・性格について、遣唐使や八幡船の事績から日本人を海洋民族と言っても、事実とあまりに食い違っている。そもそも海に囲まれているから海洋的というのは単純な話であって、海辺にある集落をみてもみな漁村かというと、むしろ海辺の農村という性格の集落の方が多いかと思うほどである。また、日本文化とは海に閉ざされた島国という考えも根強い。そういったことからみると、日本人は海に退嬰的で海に背を向けて生活を続けて来たとさえいうことができる。しかし、その一方で、祭りや祝い事などに海産物を供物や贈答品として用いたり、浄めとして塩や潮を用いる民俗は海辺だけでなく日本全体に広範囲にみられる。日本文化には、このような「海に根差した行為思考上の様式」つまり「海洋性とも称すべき伝統」が深く貫流しているのである。海に退嬰的・閉鎖的な伝統と、海のものを不可欠とする「海洋性とも称すべき伝統」という相反する海への態度・志向が、日本文化には併存しているのである。

日本文化の海洋的性格とは、プラス・マイナス両方向から「海の束縛[*3]」を受けている状態である。海に対する正の志向性と負の志向性は、海洋的性格の両面であり、二つの志向性は密接に関連していると考える。これが本稿でいう海洋的性格である。

ところで、『漁人』では「身辺の雑事と海や潮との関係」から「海洋性とも称すべき伝統」の問題を取りあげたかったとしながらも、母親の喪にあい果たせなかったと述べている。[*4]『漁人』で提起されながら十分追求できなかった海洋的性格というテーマは、桜田にとって、それ以後生涯問い続けることになる、漁業民俗研究の重要な支柱である。

そこで、本稿では、海洋的性格を視点として桜田論の構築を試みることを目的とし、そこから、日本文化の海洋的性格を民俗学的にどのように受けとめ、アプローチすることができるか望見したい。

一、渋沢敬三と海洋的性格のボーリング

論文集『漁人』に所収された論文の初出年の昭和十二年から十七年は、桜田勝徳がアチックミュージアムの研究員であった時期（昭和十年から十五年）にほぼ相当する。そこで、桜田のアチックミュージアムでの研究と『漁人』とのかかわりをみる。

アチックミュージアムとは、渋沢栄一の孫、財界人の渋沢敬三（明治二十九年～昭和三十八年）が主宰する私設研究所である（昭和十七年に日本常民文化研究所と改称）。アチックミュージアム（以下、アチックと略す）は、民具資料の収集、民俗調査の実施と民俗誌の刊行、研究者の育成と、民俗学に大きく貢献したが、なかでも、漁業史研究はアチックの研究活動の重要支柱であった。昭和七年、アチック内に漁業史研究室が開設され、社会経済史、民俗学研究のスタッフが集められた。それは「戦前戦後を通じて、我が国最大最強の漁業史研究室の創設」だったという。[*5]

桜田が所属したアチック時代前後に、渋沢敬三自身が直接かかわり追求した研究をとりあげてみていく。

渋沢は昭和六、七年に塩に関する質問票を作成し、全国の知人等に配るアンケート調査を試みる。[*6]そのきっかけについて、次のように述べている。

「〔昭和六年六月――引用者注、以下、〔　〕内は同じ〕越後三面の山中でお婆さんが清い湧き水に薄汚い塩を入れてお浄めに

用いるのを見て、塩の奥に海のあることを感じた。また花祭や中馬を見にたびたび信州、三河の奥境へ入り・・・山の上の一軒屋を訪れて、これらの家が塩をまねくが故に中馬が成立したと思った。こんなことが動機で塩に多少関心を持ち始め、昭和六年の暮入院加療中、今から考えると用意の足らぬ杜撰な質問票を作って各方面へ提出したところ意外に多数の回答を得た。[*7]」

昭和六年六月、越後三面の山中で、浄めの塩の体験をした渋沢は、そこに「塩の奥の海」を感得した。また、このときの体験について、別のところでは、「この民俗の根底に、こんな山奥に居りながら、無意識かつ潜在的であっても、深く大きく海を悟っているなと感じ入った」と述べている。[*8] 山中の塩をとおして「塩の奥の海」、「無意識かつ潜在的であっても、深く大きく海を悟っている」こと、つまり海洋的性格を感得し、塩調査によって日本人と海の関係の掘り起こしを行おうとしたのである。

このアンケート調査で得られた回答は整理、分類されて、昭和十四年に『塩俗問答集』として刊行された。さらに、渋沢は、昭和十八年に、柳田国男の古稀記念論文集である『日本民俗学のために第一輯』に「塩〜『塩俗問答集』を中心として〜」を寄せた。

また、日本漁業史研究上、魚方言名の集成整理の必要性を痛感していた渋沢は、昭和十二年一月一日から魚名資料の収集整理を本格的に開始し、[*9] 十七年三月に、魚方言名、学名、和学名、漢字魚名など魚名が集成された『日本魚名集覧第一部』が完成、十九年十月に、索引編である『日本魚名集覧第二部』が刊行された。また、十八年二月には、魚名の整理収集の過程で考察された渋沢の論考集である「魚名に関する若干の考察」が『日本魚名集覧第三部』として刊行された。[*10]

この魚名研究の過程で渋沢は『延喜式』に出てくる魚名に注目し、昭和十五年「式内魚名」において、『延喜式』に出ている魚名、主計式に出てくる魚名について、進貢地、捕魚、水産製造、用途から整理した。また、十六、十七年には「式内水産物需給試考」で、『延喜式』における水産物の需給関係に注目し、鯉、鮒、鮭、鮎、阿米魚、鱒、伊具比、鱸、鱉をとりあげて、それぞれの魚の名実、用途、需要、供給で整理し、そのほかに、淡水魚採捕様式、禁漁についてまとめた。さらに、十八年には「『延喜式』内水産神饌に関する若干考察」で、各祭祀関係記事にみられる食料神饌品目の中で水産神饌品目を整理し、海洋的要素からなる神饌品の重要性を明らかにした。[*11]

渋沢は、「〈魚名の〉集成整理は我国漁業史研究上恰も探鉱する場合のボーリングの如きもの」というように、[*12] しばしば、研究という行為を探鉱のボーリングにたとえている。[*13] 以上でみてきた渋沢の代表的研究である塩・魚名・『延喜式』研究は、まさに、日本文化における海洋的性格のボーリングということができる。

渋沢は、漁業と海洋的性格について次のように述べている。「魚類は衆庶の脳裏に深く浸み込んで」おり、「我が国民性と漁業との間に想像以上の内面的連関」があり、[*14]「極めて日本的のものの一つ」となっている日本文化にみられる「海洋性」から、「日本民族と水産」の関係＝漁業と「日本人の生活と密接不離」の関係が見出される。海（漁業）と日本人の関係は、「米作民」としての日本人と米の関係に匹敵する、文化史上の「因縁」をもっており、その関係を「上手にほどいて或る系統を立ててゆくことは非常に難しい」が、漁業史研究はこれをめざさねばならない、と。[*15] 渋沢は漁業研究の中に海洋的性格を見据えているために、その探鉱は日本文化の奥深いところに達す

る可能性をもっているのである。

渋沢が、海洋的性格をボーリングする漁業史研究にもっとも重点をおいた時期に、桜田はアチックで過ごしたということになる。

二、桜田勝徳のアチックミュージアム時代
～『漁人』の背景～

昭和六年一月に柳田国男の手伝いとして従事していた『明治大正史世相編』が刊行されると、桜田は父親の赴任地の福岡に行き、九州大学国史研究室の研究補助員（無給）になる。そして、福岡を中心に調査を開始する。（その成果は昭和九年一月『漁村民俗誌』となる。）昭和八年秋に『花祭』の著者である早川孝太郎を介して、桜田は福岡に来た渋沢敬三にはじめて会う。この出会いが機縁となり、桜田はアチックの共同調査に参加し、さらに、昭和十年五月には上京し、アチックの研究員になる。[*16]そして、十五年六月までアチックで過ごすことになるが、その五年間を、桜田は「短かったにせよ、いろんな意味で重みのあった生涯の一コマ」と述べている。[*17]

「重みのあった生涯の一コマ」というアチック時代の桜田の研究について、竹内利美は次のようにとらえている。「従来まったく閑却されてきた漁業・漁村の研究を、新しい視点から推進させようと企図されていた」アチックに「うってつけの転身の場」を得た桜田は、漁業・漁村研究に新しい研究志向を示し、「信仰伝承や言語伝承にいささか偏りすぎていた当時の民俗研究の傾向を脱して、民俗事象の基底にある生産技術・労働組織、ひいてはこれらに規定される漁民社会の構造等の解明に、研究の視点が移行しつつあった」[*18]と。また、最上孝敬は、桜田の研究の特色として、技術・社会面の研究、文書記録の探求などをあげ、それを「渋沢傘下のグループ」に深く関係したことと結びつけている。[*19]

アチックで行われた特色ある共同調査として、島々を船で移動しながらラピッドサーベイをする巡航調査[*20]と、民俗・民具・経済史など異なる分野を担当する研究員が同一地域を対象として行う調査があげられる。桜田は、巡航調査には、奄美十島、朝鮮多島海、瀬戸内海の調査に参加し、地域調査では、山口和雄、伊豆川浅吉（社会経済史）、宮本馨太郎（民具）、宮本常一（民俗・民具）[*21]などと隠岐、四国土佐、三重県志摩、伊豆などの調査を行っている。渋沢敬三は「旅行に出かけるとき、目的によって民俗と経済史の人たちを分けへだてをせず、いずれもが同じ研究基盤をもつべきだとして、同行させて」いたといい、「渋沢のもとで、いろいろな人が集まりかかわり、アチックの学風が形成されて」いったという。[*22]アチックの中で「桜田の位置はちょうどフリーのような立場で、漁業史にもかかわり、民具研究会にも顔を出し、独自の仕事を受持った」という。[*23]「アチックの学風」のなかで、桜田は、民具研究や社会経済史的視点に影響を受けながら「独自の仕事」を進めていったのである。

また、桜田はアチックで、社会経済史料や漁村文書の整理編纂を行ったり、[*24]渋沢が行った塩のアンケート調査の回答を整理し『塩俗問答集』の編集[*25]や、巡航調査報告書の編集[*26]を担当した。そのほか、魚名の集成整理にもかかわった。[*27]

のちに、桜田は、塩俗調査の整理編集の過程で、従来「日本の万人が日常必須の塩をどう扱い、どううけとってきたかという、塩の使用方面の資料はかつて甚だとぼしかったこと」、そして「それは柳田先生を中心とする大きな民俗調査の網の目には、殆どかかっていなかった事」を痛感したと述べている。[*28]また、渋沢の魚名及び『延喜式』研究については、「〔渋沢〕先生の延喜式研究は、海にとり囲

まれた魚食民族といってもよいわれわれ日本人の、歴史を考える上に、極めて重要な示唆をなされている」と評価している。[29]

海洋的性格にかかわる海の信仰について、桜田は、昭和九年に刊行された『漁村民俗誌』において、すでに事例報告している。しかし、『漁人』の序文において日本文化の「海洋性と称すべき伝統」を民俗学の課題として表出、登録したことには、アチックにおいて塩俗や魚名研究という海洋的性格のボーリング作業に密接にかかわっていたことや、渋沢の『延喜式』研究やその漁業研究観が影響しているといえる。

附記〜『漁人』序文と「海洋思想」の系譜〜

『漁人』が出版された昭和十七年当時、戦時体制にあった日本では、海外侵出の正当化と高揚のために、日本の海洋的性格が強調されていた。たとえば、昭和一七年一月に刊行された『日本民族と海洋思想』(日本文化中央聯盟編、昭和十七年一月、刀江書院)の序文を例にとると、

「我が国は悠久幾千年、海によって絶えず発展し続けてきた。・・・現に今直面せる内外の諸情勢もまた、我が国民が断固万里の波濤を衝いて、海洋に進出することによってのみ打開し得るのである。古来海を制するものは世界を制するといわれる。・・・皇国が肇国以来の八紘一宇の精神に則り、世界に新秩序を齎せんが為には、まず意を海洋に注がねばならぬ。」

こうした海国海洋国家・日本というとらえ方には、日本の近代化にともなう国益・国防と「海洋思想」の形成・系譜をたどることができそうであるが、そうした「海洋思想」の系譜とは別の、「海洋」の日本文化論を桜田は『漁人』の序文で提起したものと思う。[30]

三、〈海産物需給民俗〉と海洋的性格の形成

桜田が『漁人』では果たせなかった海洋的性格の問題が、その後、どのように追求展開していったのか、漁業民俗研究の中でいかに追求したかについてみていく。

(一)「漁民と神幸」について

『漁人』所収のなかで海洋的性格にかかわるものとして、第三篇海辺習俗の「海村の神幸路」(『民間伝承』六巻四号、昭和十六年一月)がある。海村において御輿渡御のルート(神幸路)が神体の漂着地点にかかわることを報告したが、この「神幸と海汀の関係」に関する問題は「拙書(『漁人』)刊行に際して是非共多少考えてみたいと予定していたが、母の喪にあうて今は成し難い故、何れ稿を改める」とある。[31] 序文においても、海洋的性格について新たに稿を起こして記したかったが「昨秋母の喪に遭ってしまい全く挫折」してしまったというところ[32]と対応していることから、『漁人』において企図された海洋的性格の問題は、「海村の神幸路」にみる「神幸と海汀の関係」を念頭においていたものと考えられる。そして、この問題は、昭和十七年七月に新潟県西頸城郡能生町小泊の漁民の祭礼参加の事例報告である「漁民と神幸」(『民間伝承』八巻三号)を経て、二十二年に柳田国男の古稀記念論文集である『日本民俗学のために第五輯』において改めて「漁民と神幸」と題して論じられた。

「漁民と神幸」では、神祭と漁業者の特別な関係について、「海のものを必ず神饌に用いるという国風ともいうべき慣習」つまり海産物神饌の供進が特定漁村・漁業者に限られている事例と、祭礼神祭において特定の漁民が特殊な役割を演ずる事例及び、その役割が与

えられることになった由来を整理し、若干の考察を加えている。[*33]

神供の魚が漁村から供進される例や祭礼の海上渡御などの事例は多くみられるのだが、特定の海産物神饌と特定の漁村・漁民の関係や、祭礼と特別な役割を果たす特定の漁村・漁民の関係に注意して調査報告された事例は従来少なく、桜田はこの視点を提起して事例を整理し、その重要性を喚起した。[*34]

そして、「漁民と神幸」の結びとして、それまでの事例をあげて考察を加えて来た流れとは、やや唐突な感じで、今後の見通しとして、次のように述べられている。

「漁人海人の海上移住に伴う彼等の信仰の伝播は、古い昔より非常に根深く我が国土に浸透していると信ぜられるが、彼等の海上移住は近世まで繰り返し行なわれたものと推察せられ、その間一般民間神事の上にも彼等の作用せる所が少なくなかったであろうと推察せられる。而してその作用の契機たり得た大きな一つは、彼等の神供の魚の供給力にあったのではあるまいか。[*35]」

ここで望見された神祭りに特別な役割を果たす特定漁民の存在から出される神供供給者としての漁民のとらえ方は日本民俗文化における、経済活動だけではとらえられない漁民・漁村の位置づけに重要課題であり、漁業民俗における海洋的性格研究の重要な方向である。

しかし、海の信仰や海洋的性格は、一方的に漁人海人の神供の魚の供給力に帰することはできまい。漁人海人の海上移住とともに彼らの「神供の魚の供給力」が契機となって漁人海人の信仰が一般神事に作用して、海の信仰・海洋的性格が日本国土に浸透していった――という、その「わが民族文化に、海洋的な要素を深くにじみ込ませた[*36]」仕組み、プロセスについて、民俗学研究・調査において、具体的な実態として、どのようにとらえていくことができるのかが問題である。

この点について、桜田は、「漁民と神幸」の事例研究の延長として、どのように進めようとしたかについて、次にみていく。

(二) 漁業民俗における〈海産物需給民俗〉試考

昭和二十年から三十年代にかけて、桜田は自己の研究を方法論的に総括して「漁村民俗」あるいは「漁業民俗」と標榜して論を主張する一連の諸論文をまとめた中で、「漁民と神幸」に関するテーマは、「漁業のあり方と海産物を消費する側の民俗との関係」としてとりあげられ論じられている。[*37]

「水産物消費の習慣と、これに対応するそれを供給してきた漁業者側の生産とは、互いに刺激し合い、支持し合って、ともにこの両者を発展させ、今日の状態を招来させたにちがいない。

(中略)

陸と水との生産に関するいろいろの交流や両者の結びつき方の中で、どれだけ日本文化の特徴をはじめて導き出しうるような、無数の個別な生活体験をつみ重ねてきたか、はかり知れぬものを感ぜざるをえない。われわれは水産物の生産と消費との関係に関する民俗の追究から、どれだけそれを捜しあてることができるか予測はできないが、漁業民俗の研究もそれらを望見して進めたいものであると思う。[*38]」

「水産物消費の習慣」とは、「祝いごとや忌晴れの精進あげなどには必ず魚を儀礼としても食べねばならぬとする習慣[*39]」など、祭りや祝い事などに海産物を供物や贈答品として用いたり、浄めとして塩や

潮を用いる民俗である。この水産物を消費する側の民俗と、漁業活動のあり方・発展は、相互に影響しあいながら「日本文化の特徴」を導き出してきたわけであり、両者を関連させてとらえる分野が追求されねばならないとする。

そして、次のように、漁業生産と水産物を消費する側の民俗との関係について具体的にみていく。

「そういう〔水産物消費の習慣の〕中でも今日最も広く行なわれているのは、正月に東国では鮭を祝い魚として用い、西国では鰤を正月魚としている習慣であって、塩鮭・塩鰤が歳暮の贈答品として用いられる量は莫大なものであろう。しかしながら、今日のように正月に鮭・鰤・数の子・昆布などの水産物をぜひ使わねばならぬとする広く行なわれる習慣が、非常に古くからそのとおりに行なわれえたとはとうてい考えられない。[*40]」

海産物消費の民俗の中でポピュラーな例、今日最も広く全国的で均一的に行われている、正月魚の鮭と鰤、数の子、昆布などの食習が、『延喜式』の神饌体制から今日までそのままであったはずがない。

「正月に数の子を食わねばならぬとするしきたりのこのような〔産地から遠い山地にも〕普及は、北海道のニシン漁業が盛んにならねば起り得るはずもなかった。したがって、正月魚としての数の子普及の経過をよく知らないが、たぶんニシン〆粕が魚肥として広く各地に用いられた沿革と、そうはかけはなれない新しく固定したしきたりであったと思われる。[*41]」

正月の数の子の食習の形成は、北海道のニシン漁業の発達があって可能なことであり、その普及は明治以降、あるいは江戸中期以降ということになり、その意味で、正月の数の子の食習は「新しく固定したしきたり」ということができる。同様に、正月魚の鰤の食習は北陸の鰤定置網漁業の盛況と不可分の関係でできあがったといえる。[*42]

また、正月魚の普及が漁業の発展に影響されてきた一方で、ハレの魚食が漁業のあり方に影響刺激を与えてきた面もある。

「正月や節句やお祭の日にはある特定の魚種の祝魚を食べねばならぬとする習慣が、各地各様にあったのであるが、その習慣が大きく固定するにはその海産物を供給する生産が伴われねばならなかったのは当然であるが、江戸のかさごの食い方が意外に遠い三陸海辺のかさご漁業を刺激するというようなことが延喜式以来くりかえされて、海辺と内陸との大きな交流の糸口になったことに注意したい。[*43]」

ニシン漁業や鰤定置網業の発達が数の子や鰤などのハレの魚食を導いてきたと同時に、逆に、正月魚や五月節供のかさご食のようなハレの魚食（「際物的な需要」[*44]）が地域漁業を刺激し発達させたのである。

そして、「晴れの日に魚を消費する習慣が、漁業のあり方、水産業のあり方と密接に関連して日本人の特殊な魚食文化を展開してきた[*45]」のである。つまり、「特殊な魚食文化」イコール日本文化の海洋的性格は、漁業生産側の民俗と海産物消費側の民俗が相互に関連しあって固定、展開、形成されてきたのである。

ここで一つの問題として、「今日の状態」が「新しく固定したしきたり」であるならば、「海魚に縁遠い山地の村々においてはもとはこれに代わるいかなるものを食したであろうか[*46]」という、今日の正月魚の全国均一化以前の形をさかのぼって調べていく方向が提起される。しかし、ここでは、少しでも古い形を遡及していくのではなく、「今日の状態」を作り出した過程、仕組み、プロセスが、漁業生産

側の民俗と海産物消費側の民俗のさまざまな結びつきのあり方から明らかにならねばならないというのである。

（三）小括〜〈海産物需給民俗〉の提示〜

「漁業生産〔供給〕と海産物を消費する側〔需要〕の民俗との関係」とは、渋沢敬三の『延喜式』研究の論文題目の「式内水産物需給試考」をふまえてみると、〈海産物需給民俗〉ということができよう。渋沢が『延喜式』にみられる神饌体制を水産物の需給関係からとらえて解きほどいていったことを、桜田は、『延喜式』ではなく漁業民俗の中で試考しようとしたのではないだろうか。

桜田は、「延喜式の〔海洋的要素からなる〕神饌体制の伝統を、今日の海で働く人の中に全体的に求める」[*47]ために、どうしたらよいか問い続けたのである。[*48]そして、その問いの延長線上に、「漁業生産と海産物を消費する側の民俗との関係」つまり〈海産物需給民俗〉という課題は位置づけられると考える。桜田にとって、漁業民俗研究において海洋的性格を追求することは、渋沢敬三の『延喜式』研究を、今日の民俗調査においていかに受けとめ、民俗学的にいかに進展させることができるかを考えることであった。

さらに、渋沢が「魚名は、人と魚との交渉の結果成立した社会的所産」[*49]といったことをふまえて、日本文化の海洋的性格とは、〈海産物需給民俗〉をとおして成立した社会的所産といえるであろう。

おわりに

桜田勝徳論について海洋的性格を軸にしてみた。『漁人』の序文で述べられた「海洋性と称すべき伝統」の提起を、桜田のアチックでの研究と、その主宰者渋沢敬三の研究との関係からとらえた上で、桜田の海洋的性格に関する研究の内容として「漁民と神幸」をとりあげ、その延長で方法論的課題として提示された「漁業生産と海産物を消費する側の民俗との関係」＝〈海産物需給民俗〉という分野をみた。そして、日本文化の海洋的性格について、〈海産物需給民俗〉をとおしてその形成の過程、仕組みをとらえていく方向をみた。

〈海産物需給民俗〉とは、海と陸との交流関係である。桜田は、漁村と背後農村との関係を四つに分類して、①「農産物若しくは漁業用物資等と水産物との交換関係に依り維持せられおるもの」、②「労力の需給関係に依り維持せられおるもの」、③「通婚等の縁組み縁故関係に依るもの」、④「汐干狩、潮竈、塩井場、神幸、神送り等の信仰行事関係によるもの」としている。[*50]そして、①と②の経済・社会的側面において「背後農村との交渉」[*51]で交易関係を述べ、④の信仰的側面において「漁民と神幸」で漁民の海産物神供の供給力を述べたことになる。「海の生産と陸の生産を大きくむすびつけて」形成された「日本独自の時代推進の原動力を生みだす一つの素地」[*52]を解明するために、〈海産物需給民俗〉研究は、①から④の全体のなかで考えていかなければならないのはもちろんである。とはいえ、本稿では、この四分類に即していえば、海洋的性格の形成という問題を④を主軸としてとらえていく重要性を述べてきたことになる。

最後に、〈海産物需給民俗〉の実態を具体的にとらえていくために、桜田論から導かれる今後の課題についてまとめて、本稿の結びとする。

まず第一に、本稿でみた「漁民と神幸」の事例研究を経て〈海産物需給民俗〉の方法論的課題を提示した桜田論の延長でいえば、次の段階は、〈海産物需給民俗〉の視点をもって、「漁民と神幸」にもどり、そこでとりあげられた二十三事例について再考していくとい

うことになろう。私は、これを「海産物神饌の需給関係からみた日本文化の海洋的性格の形成過程に関する民俗誌的研究」ととらえている。[*53]

第二に、「漁民と神幸」で提起されながら残された重要な問題として、〔〈西日本の一部で〉一般に賤視せらるる傾向にあり、亦自らもその様に卑下し勝ちである漁業者の何が故にかくのごとき事情に至りやの問題〕があり、桜田はこの問題を神祭と漁民の関係から考えておきたかったと述べている。[*54]関連して、『漁人』所収の「漁業を享け継いで来た人達」では、海に背を向けた生活や一部の漁業者を賤視する慣習の理由として、仏教の影響や鎖国政策などのほかに、「我々の祖先が海を畏敬し、漁及び或る種の漁獲物を神聖視したあまりに、漁及び漁獲物を平常のもの以外のものとなすの傾向すら生じ、一般人をしてかくのごとく漁及び海に疎遠ならしめるの結果を招来したか」[*55]と、海に対するネガティヴな態度を「聖なる海の信仰」[*56]ゆえととらえている。本稿の最初でも述べたが、海に対する負の態度・志向も日本文化の海洋的性格の一面であり、正の態度・志向と密接に関連しているのである。海に背を向け、一部には漁民賤視という、海に対する負の志向性を、どのように「漁民と神幸」の延長線上に位置づけ、〈海産物需給民俗〉をとおしてとらえることができるか今のところ不明であるが、日本文化の海洋的性格として負の志向性も追求していかねばならない。

第三に、今日ハレの魚食としてもっともポピュラーといえる正月魚として鮭、数の子、昆布などの普及した経過、形成過程に対する研究――「どのような組織と行動によって捕獲し、輸送され、消費者の手に渡り、またどのような食べ方をしたかということについての調査」[*57]――が、ほとんどなされてこなかった理由として、従来の漁村調査の問題に関連してくる点を指摘している。

「〔石川県河北潟に面する北灘村史の編纂を思い立った人が、そこの漁師は〕北は北海道から南は鹿児島までいろいろなところに移住発展しているから、その全部の連中にまず会ってみることから始めたいと発願して、三年がかりで・・・その旅行をなし、〔それらに基づいて村史料を出版したが、〕漁村史にはこういう手続きの必要な純漁村が・・・少なくはない。また近年釧路市が漁業発達史を完成されたが、・・・釧路市地域には内地のいろいろの漁村からここに移住し、その人たちがそこの漁業発達のにない手になったので、その人たちを輩出した母村における調査に大へん努力された。こうした新しい努力の試みが大きく活用されるようにならないと、延喜式の〔海洋的要素の強い〕神饌体制の伝統を、今日の海で働く人の中に全体的に求めることは困難だと思う」[*58]

正月の魚食に密接に関係してきた北海道や北陸における、近代の、漁業発展とそれを支えてきた人々をとらえるためには、「北は北海道から南は鹿児島までいろいろなところに移住発展しているから、その全部の連中にまず会ってみることから始め」る調査や、「内地のいろいろの漁村からここに移住し、その人たちがそこの漁業発達のにない手になったので、その人たちを輩出した母村における調査」を行わなければならなかった。そして、それは、従来のように地先沿岸に結びついた漁村調査とは異なる、出漁者と移住者に視点をおいた漁村調査の試みなのである。「延喜式の〔海洋的要素の強い〕神饌体制の伝統〔＝日本文化の海洋的性格〕を、今日の海で働く人の中に全体的に求める」ためには、〈海産物需給民俗〉研究に対して、「出漁者と漁業移住」[*59]のような「新しい努力の試み」が生かされねばな

らないと提言している。

第四に、五月節供にみられた江戸のかさご食形成と地域（三陸）漁業の関係にふれたが、[*60] それに関連して、海洋的性格と地域性の問題を登録しておく。日本文化の基層として海産物消費の民俗は広くみられるなかで、地域的な差異が存する。たとえば、よくとりあげられる例だが、正月には魚が欠かせないとされるなかで、正月魚の魚種が東日本では鮭、西日本では鰤というように大まかに分かれ、さらにそのなかに地域的差異がみられる。また、ノシとして魚の鰭が用いられた贈答慣行のなかで、九州から山陰沿岸地方で飛魚（アゴ）の鰭地域がある。[*61] こうした特定の魚への志向に対する地域差に関連して、桜田は、海幸（寄り魚）に対する漁民の態度について、「サケ・マスあるいはニシンなど、自分の生まれた川や海岸に産卵期に大群をなしてやってくる魚を主体とした比較的とりやすい北方漁業」、「サンゴ礁の中に分散している種類の多い魚を捕」ったり、「サンゴ礁を越えて外の海へ出るとカツオ・サワラ・トビウオなどを捕る」南の漁業、「ブリ・イワシ・アジなどを主とする中間地帯の漁業」では、寄り魚への対応の仕方が異なり、そのちがいは「村々の共同体の構造仕組みの上にも反映」したであろうと述べている。[*62] そして、それは、ハレの特定魚種の魚食習慣と相互関連して地域的な魚食文化形成にも反映したものと考えるとき、海洋的性格のあらわれ方に地域性という問題が提起されると考える。さらにいえば、日本民俗文化のなかの〈海〉という大きな流れ（＝海洋的性格）の、さらにそのなかには、いくつかの異なる分流（体系）が抽出されるものと考える。

注

＊1　野地恒有「桜田勝徳の〈漁村民俗〉考～漁村の民俗研究に向けての覚書～」『史境』十四号、歴史人類学会、一九八七年。この論考において、私は、桜田研究の今後の課題として、①アチックミュージアム時代の検討、②漁村民俗研究の都市論への展開、③水産物を消費する側の民俗の問題をあげた。本稿は、この①と③の課題に対応する。

＊2　桜田「序文」『漁人』六人社、一九四二年、一～三頁、（後に『桜田勝徳著作集』二巻、名著出版、一九八〇年）。

＊3　「海の束縛」ということばは、柳田国男が日本料理の特徴としていった「鰹節の束縛」（「本場の広東料理」『定本柳田国男集』第三巻、筑摩書房、一九六八年）をふまえている。

＊4　前掲＊2「序文」『漁人』、三～四頁。

＊5　二野瓶徳夫「解説　日本漁業史研究の先覚者」『渋沢敬三著作集』第二巻、平凡社、一九九二年、五七〇頁。

＊6　渋沢敬三「序」渋沢編『塩俗問答集』慶友社、一九六九年。質問票の作成年が、この「序」では「昭和七年初春」に、後掲＊7「塩～『塩俗問答集』を中心として」では「昭和六年」になっている。

＊7　渋沢「塩～『塩俗問答集』を中心として」『渋沢敬三著作集』第一巻、平凡社、一九九二年、三六二～三六三頁。

＊8　渋沢「『中馬制資料』跋」『渋沢敬三著作集』第三巻、平凡社、一九九二年、四一六頁。

＊9　毎朝出勤前の六時半から八時半が魚名の研究時間とされ、これが二年半続いたという（渋沢「『日本魚名集覧』再版　序」『渋沢敬三著作集』第三巻、平凡社、一九九二年、四〇五頁）。昭和十三（一九三八）年には、アチック内に魚名編纂室がもうけられ、二名のスタッフが整理に当たり、十四年からは宮本常一も加わった。渋沢の魚名集成に対する意欲は「エネルギッシュであり執拗」であり、毎晩のように討論の相手となった宮本は「（渋沢）先生に命を食われるぞ」と同僚からいわれるほどであった（宮本常一「水産篇（二）解説」『日本常民生活資料叢書』第三巻、三一書房、一九七三年、一

二三八～一二四一頁）。

＊10 「日本魚名集覧第一部・第二部・第三部」『日本常民生活資料叢書』第三巻、三一書房、一九七三年。第三部「魚名に関する若干の考察」は、昭和三十四年『日本魚名の研究』（角川書店）と改題して刊行された。

＊11 渋沢「式内魚名」「式内水産物需給試考」「『延喜式』内水産神饌に関する若干考察」『渋沢敬三著作集』第一巻、平凡社、一九九二年。

＊12 渋沢敬三「『日本魚名集覧』小序」『日本常民生活資料叢書』第三巻、三一書房、一九七三年、九頁。

＊13 たとえば、渋沢「探鉱」『渋沢敬三著作集』第三巻、平凡社、一九九二年。

＊14 渋沢「日本民族と漁業」『渋沢敬三著作集』第五巻、平凡社、一九九三年、二一〇～二一一頁。

＊15 渋沢「所感～昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一回大会にて」『渋沢敬三著作集』第一巻、平凡社、一九九二年、六〇七～六一七頁。

＊16 「年譜」『桜田勝徳著作集』第七巻、名著出版、一九八二年。

＊17 桜田勝徳「水産篇（一）解説」『日本常民生活資料叢書』第二巻、三一書房、一九七三年、七二九頁。

＊18 竹内利美「解説」『桜田勝徳著作集』第二巻、名著出版、一九八〇年、四六七頁。

＊19 最上孝敬「桜田勝徳と日本民俗学」『歴史手帖』八巻四号、一九八〇年。

＊20 「海を学問の舞台」としなければならぬとする柳田国男は、民俗学と関係諸科学が共同して「ぐるぐる航海してあるく研究所」の夢を語り、渋沢の巡航調査について、「世間が知らずにいてはすまぬほどの壮挙」であり、「実は私も内々やられたなと思った」と述べている（「水上大学のことなど」『定本柳田国男集』第一巻、筑摩書房、一九六八年。）

＊21 前掲＊16「年譜」。

＊22 河岡武春「中国・四国篇（一）解説」『日本常民生活資料叢書』第二〇巻、三一書房、一九七三年、八二四頁。

＊23 前掲＊22「中国・四国篇（一）解説」、八二三～八二四頁。

＊24 前掲＊16「年譜」、＊22「中国・四国篇（一）解説」。

＊25 桜田勝徳「あとがき」前掲＊6『塩俗問答集』、桜田勝徳「水産篇（三）解説」『日本常民生活資料叢書』第四巻、三一書房、一九七三年。

＊26 前掲＊22「中国・四国篇（一）解説」、渋沢「『瀬戸内海島嶼巡訪日記』序」（一九四〇年）『渋沢敬三著作集』第三巻、平凡社、一九九二年。

＊27 前掲＊16「年譜」、＊9宮本常一「第三巻 水産篇（二）解説」。

＊28 前掲＊25「水産篇（三）解説」、七〇五頁。

＊29 前掲＊17「水産篇（一）解説」、七三六頁。

＊30 第二次大戦前に文部省から海に関する歌の話を依頼された折口信夫は、日本には海洋の幸福を歌った歌がなく、海に対する表現欲がみられない、海に対しては怖いというほかは表現がなく、それは、海の噂をすることを避けたのだという（『民俗学について～第二柳田国男対談集～』筑摩書房、一九六五年、一五頁）。講演依頼側の考えた国家側の「海洋」と折口や『漁人』序文の「海洋」が、対比されよう。

＊31 前掲＊2『漁人』、一九六頁。

＊32 前掲＊2「序文」『漁人』、四頁。

＊33 桜田「漁民と神幸」『桜田勝徳著作集』第一巻、名著出版、一九八〇年。

＊34 神祭と漁業者の関係についての注目は、「海の労働について」（一九三五年）（『桜田勝徳著作集』第一巻、名著出版、一九八〇年）において、神供供給としての漁業ついて述べている。「漁民と神幸」に展開していく「海の労働について」や「海村の神幸路」の問題には、アチックの奄美十島や瀬戸内海の巡航調査で受けた印象が関係しているようである。

＊35 前掲＊32「漁民と神幸」、二二八頁。

＊36 桜田「漁業と漁民（解説文）」（日本民族学協会編『日本社会民俗辞典第一巻』（一九五四年）の「海人」の項）『桜田勝徳著作集』第二巻、名著出版、一九八〇年、四五一七頁。

＊37 桜田「漁業」（一九五九年）『桜田勝徳著作集』第一巻、名著出版、一九八〇年、「漁業民俗について」『神奈川県の歴史～県下の民俗篇（上）』神奈川県立図書館、一九六一年。

＊38 前掲＊37「漁業」、二五～二六頁。

＊39 前掲＊37「漁業」、二五頁。

＊40 前掲＊37「漁業」、二五頁。

＊41　桜田「正月の魚」（一九五九年）『桜田勝徳著作集』第一巻、名著出版、一九八〇年、二四八～二四九頁。

＊42　前掲＊41「正月の魚」、二四九～二五〇頁。

＊43　桜田「江戸とかさご」（一九五九年）『桜田勝徳著作集』第五巻、名著出版、一九八一年、一六六頁。

＊44　前掲＊37「漁業民俗について」、六五頁。

＊45　前掲＊37「漁業民俗について」、六六頁。

＊46　桜田勝徳「節の肴のこと」『民間伝承』六巻七号、民間伝承の会、一九四一年。

＊47　桜田勝徳『海の宗教』一九七〇年、淡交社、一三四頁。

＊48　昭和四〇年代から晩年にかけても（『漁村民俗誌』から『漁人』のころを第Ⅰ期、昭和二〇年代から三〇年代の方法論的諸論文のころを第Ⅱ期とすれば、これは第Ⅲ期といえる）、海洋的性格の問題は、「海と民衆のつながりを求めて（特集海と日本人　その秘められた生活史）」（『海の世界』一二巻一一号、日本海事広報協会、一九六五年）、『海の宗教』（前掲＊47）、「海洋的要素から成る神饌品（特集ヤポネシア　海洋民族）」（『日本図書新聞』一五五五号、一九七〇年七月二〇日（海の記念日））、「潮のかなたに見た祖霊の国」（（一九七五年）『桜田勝徳著作集』第一巻、名著出版、一九八〇年）、「『近代化』と民俗学」（（一九七六年）『桜田勝徳著作集』第五巻、名著出版、一九八一年）において、くりかえしとりあげられ述べられている。なかでも、『海の宗教』（前掲＊47）は、「われわれ日本人の海との長いふれ合いの中で、海に何を願い、何を求め、何を訴えてきたか」について、「身近に日常的に体験してきた場に即した形」で、昭和四五（一九七〇）年の夏休みに五十日足らずで一気に書きあげた（前掲＊16「年譜」）といい、日本文化の海洋的性格について求心的にまとめられた著作である。桜田の著作集未所収のなかに海洋的性格の問題を述べた重要なものが多くみられる。

＊49　渋沢「魚名の特徴」『渋沢敬三著作集』第二巻、平凡社、一九九二年、一一頁。

＊50　桜田勝徳「背後農村との交渉」（一九四九年）『桜田勝徳著作集』第一巻、名著出版、一九八〇年、三五三頁。

＊51　前掲＊50「背後農村との交渉」

＊52　前掲＊41「正月の魚」、二五〇頁。

＊53　その事始めとして、「漁民と神幸」のなかで一定漁村の神供料供進例としてあげられた、愛知県宝飯郡御津町の御津神社のイカマツリについて予備調査報告した（野地恒有「御津神社のイカマツリ」『喜談通信』三号、愛知教育大学野地研究室、一九九四年）。

＊54　前掲＊33「漁民と神幸」、二一〇・二一六頁。

＊55　桜田勝徳「漁業を享け継いで来た人達」前掲＊2、四頁。

＊56　前掲＊48「海と民衆のつながりを求めて（特集海と日本人　その秘められた生活史）」。

＊57　宮本常一「解説」『桜田勝徳著作集』第一巻、名著出版、一九八〇年、四一二頁。

＊58　前掲＊47『海の宗教』、一三四頁。

＊59　桜田「出漁者と漁業移住」（一九四九年）『桜田勝徳著作集』第一巻、名著出版、一九八〇年。

＊60　前掲＊43「江戸とかさご」

＊61　野地恒有「回遊魚の道」『海と列島文化～日本海と出雲世界～』第二巻、小学館、一九九一年。

＊62　「海の幸の民俗史」（昭和五〇年の講義ノート、この見出し題名は編者による）小川博編「海事民俗雑考～桜田勝徳氏の講義メモから～」『海事史研究』三二号、日本海事史学会、一九七九年。寄り魚に対する漁民の態度と地域差については、桜田『海の宗教』（前掲＊47）にも述べられている（一二〇～一二一頁）が、講義ノートの方が、この点をストレートに述べているので、こちらを引用した。

（平成六年八月十五日受理）